

「テロの犠牲者を悼み、祈りと思慮深い対応を求める理事会声明」

「だから、思慮深くふるまい、身を慎んで、よく祈りなさい。何よりもまず心を込めて愛し合いなさい。愛は多くの罪を覆うからです。不平を言わずにもてなし合いなさい。」（一ペトロ 4 章 7-9 節）

今月 14 日早朝（日本時間）、パリで同時多発テロが起き 130 人以上が死亡、多くの負傷者を出しました。また、その前日にはレバノンの首都ベイルートで 2 件の自爆テロが相次ぎ、43 人が死亡、239 人以上が負傷しています。いずれも事件直後に過激派組織 IS（Islamic State）が犯行声明を出し、パリの事件後には更なる犯行予告を発信しています。これらの出来事に世界中が衝撃をおぼえ、また遠く離れた日本に住むわたしたちも決して他人事ではない危機感、日本国内でも起こり得るテロへの恐れの中にあります。

わたしたちはこの事態の中でまず、突然の悲劇に襲われ生命を奪われた犠牲者とその家族、そして今も日常生活を脅かされている人々のために主の慰めと護りを祈りましょう。いかなる理由があろうとも決して許されない暴力行為に対して憤りを覚えるとともに、それを生み出す人間の罪性を主に告白し悔い改めの祈りをささげましょう。

この事態を受け、フランス政府は即座に報復攻撃を実施し、更にこれを「戦争状態」だと位置づけ、憲法改正や大統領の権限強化、更には移民政策の見直しなど一気に右傾化させています。まさに 2001 年 9.11 同時多発テロ以降のアメリカの状況が圧縮して再現されています。先に安全保障関連法（戦争法）を成立させ、アメリカとの軍事活動の一体化を可能にした日本政府は、この度のフランス政府や議会の対応に倣ってテロとの闘いに歩調を合わせていくことが予想されます。フランスが即座に国境線の管理強化を行ったように、日本への入国者の管理、「危険分子」の排除を強めていくでしょう。人権感覚や移民政策の先進国であったフランスにおいて起きた事件を反面教師とし、移民・難民の受け入れ間口をますます狭くし、管理と排除の論理で外国人政策を固めていくでしょう。そうして世界規模で積極的に取り組まねばならない難民支援対策が著しく後退することを憂慮します。

そのような事態が予想される中、連盟理事会は諸教会・伝道所の皆さまに、テロの惨事を憂いつつも、冷静に事柄を見つめ、暴力の連鎖を決して引き起こさない対応のために、次のように熟慮し祈ることを呼び掛けます。

- 更なるテロ攻撃で犠牲者が生じないように
- 報復に報復が重なり世界戦争の勃発を招かないように
- 命の危機を逃れて国境を越えてくる人々を受け入れる間口が閉ざされないように
- 対テロ政策で日本政府が米国を中心とする軍事活動に同調しないように
- 日本政府が日本国内で生きる人々の権利を侵害したり制限したりしないように
- 特にイスラム教信仰を背景とする人々に対する差別や弾圧が起こらないように
- 対立を生み出す根を見つめ、その解決と克服のため国際社会が努力できるように

2015 年 11 月 19 日

日本バプテスト連盟理事会